

講義名	財務分析論		
科目区分	学部フリーゾーン		
担当教員	木村 敏夫		
開講期・曜日・時限	後期 金曜日 1時限		
履修開始年次	2年生	単位数	2
		講義コード	51028

主題と概要

「分析」とは、ある「対象」の事象内容、性質などを明らかにするために、ある視点のもと（ものの見方）、「細かな要因」（構成要因別・説明変数）に分解し、それぞれの要因の特質を評価し、最後に、その分解した対象の要因を「総合」（被説明変数）し、点数などを付すことである。

「財務分析論」は、対象を（営利）「企業」（株式会社）とし、「財務の視点」に立脚する。視点を確立するために、証拠（資料）を必要とする。財務分析は財務の視点に立つ証拠「資料」をもとに、評価を下す方法論・技術論である。この証拠は財務の視点に立脚して蒐集、集約される「財務情報」（財務データ）である。財務情報は、一定の枠組にもとづき定量的（価値・物量）に測定された客観的なデータである。

「企業」の経済活動を「財務（価値）データ」に変換する枠組が「企業会計」である。したがって、財務分析は定量情報、主に価値（価格）変換された財務資料、企業会計の枠組で認識、測定、報告される情報（財務報告書）に依存することになる。企業会計が提供するデータを分析し、判断し、それを評価値に変換し、一定の総合評価を下すことになる。企業会計情報は「企業」「分析」「評価」する資料として完全ではない。財務資料の限界が財務分析の限界とも言えるのが現状である。

財務分析には特に価値評価に転化された「財務情報・財務数値情報」を利用する。「企業」を評価するためには、財務情報以外に、非財務情報を補足・補完しなければならない。社会情報、環境情報などが開示〔欧州などでは制度化されている〕されている。非財務情報を企業の〔業績〕評価に利用することは、主観的判断をとまなう。しかしながら、非財務情報（定性情報）を利用した定性分析を加えることで、現在の「企業分析」（企業評価）を行うことが可能となる。

講義、財務分析論は、「企業」を財務の視点から評価する方法等を学修することにある。実際の「企業（会社）」

到達目標

受講者が「企業」（会社・株式会社）の現況を、主に、財務情報を利用して「財務」の視点（資本の調達・運用ととの評価）から理解、判断する知見〔知識体系〕を得ることを目標とする。

提出課題

考えていない。

評価の基準

評価は、中間試験（50点）と定期試験（50点）の合計で判定する。

履修にあたっての注意・助言他

財務分析論は科目の性格から経済学、経営学、簿記原理、会社法、会計学原理、管理会計、財務管理等の理解が不可欠である。受講学生は、上記の学科を履修し、理解していることが必要である。講義は、実際の企業（会社・株式会社）を例に取り、財務情報等にもとづき財務の視点から企業を評価する。講義は知識体系にもとづく。一回一回積み上げて体系を成す。講義はトピックではなく、途中から、講義に参加しても理解は不可能である。単に「単位取得」を目的として履修することは避けるべきである。結果として、例年、約7割の履修者が途中放棄する。企業の財務分析を行うためには、既存の知識で理解不可能である。事前に配布資料、関連書籍を読了する等自分でやらなければ、新たな知見を得られないと考えてもらいたい。

教科書

プリント資料及び参考文献

プリント資料及び参考文献
 なお、講義資料「財務情報分析講義」（2018年度A4で1頁43字×33行、約280頁になる予定）を、講義テーマ別、講義前に期間限定でポータル（PDF形式）に公開する。また、講義進行内容を示す、スライド資料、講義資料をも配布する。しかし、スライド資料は、講義内容の進行を示すだけで、これだけで講義内容を理解することは不可能である。したがって、スライド資料だけを持込、試験で点数を取ることも不可能である。参考文献
 山根・太田・村上「第3版ビジネスアカウンティング」中央経済社
 杉本・井上・梶浦訳「財務諸表分析と証券評価」白桃書房

授業計画

- 第1講 財務分析の目的・目標
- 第2講 財務情報と企業会計
- 第3講 財務分析のデータ
- 第4講 財務分析のデータ
- 第5講 財務分析の枠組み
- 第6講 財務分析の方法
- 第7講 収益性分析〔費用収益分解〕
- 第8講 流動性分析〔経営破綻〕
- 第9講 キャッシュフロー分析
- 第10講 有利子負債分析
- 第11講 資本構成、利率と利益率
- 第12講 資本構成と資本コスト
- 第13講 財務情報と企業破綻
- 第14講 企業評価論（1）- EVA, MVA等
- 第15講 企業評価論（2）- 証券価格、市場評価

予習・復習

当然のことです。

備考

大学の講義は、学問・学科目を「理解する」のが目的・目標する。体系的な理解の後に、理解した知識をもとに、「考える」。これが「知恵」となる。知恵は自分でしか取得できない。与えられるものではない。学後知不足。学生は、「真似ること」から始める。真似るとは、「書き写す」ことではない。書き写すは、著作権違反という、りっぱな窃盗犯罪です。